



新米先生の「その後」

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子

退職して十年余。この間ずっと初任者指導に携わってきました。初期のころの新米先生は、今学校の中核となり活躍しています。その成長には舌を巻く思いがします。それだけに新米先生だったころを思い浮かべると、感慨無量なものがあります。

本記事ではそんな先生方の新米先生だったころを振り返り、どんな課題があったのかを事例的に数点とり上げ、考えてみたいと思います。

○**子どもとの距離感が適切でなかった例**

まず、低学年にみられたのは、何でも新米先生が手を下してしまう姿でした。教科書やノートを出さない子がいると、先生が出てあげてしまいます。姿勢の悪い子がいると、先生がその子の肩に手を置いて、姿勢を正させます。何度も繰

り返されマンネリになっているからか、先生は無言です。そうすると子どもは先生に依存するようになり、事態は一向に改善されないようでした。

このような場合、まずは無言でなく手を替え品を替え、その時思い付いた言葉でいいですから、「あら。残念。この前は自分でやれたのにね」とか、「今度自分で出すことができたなら、先生はうれいいな」など、自分でやる気になるような言葉をかけてほしいと思いました。そして、自分で教科書やノートを出せたときは、間髪入れず喜びの声をかけてほしいと、そんな話をしました。

次に、畑を耕したり掃除したりしているときの新米先生の姿です。子どもと一緒に活動するのはいいのですが、自分も子どもと同じように耕すことや掃除に専念してしまいうため、子どもの活動の様子を見ていないのでした。もちろん声をかけることもありません。忘れて遊んでいる子がいても気づかないようでした。

子どもと一緒に活動すること自体がいけないわけではありません。ただそれに専念するのではなく、子どもたちの活動の様子を見守るのも大切にしてほしいと思いました。

そして、一生懸命活動したり気働きしたりしている子をほめたり、仕事を見つけれない子に具体的な指示を出したりするよう助言しました。

子どもと動き回れる。子どもと感覚がびったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

○教師の好き嫌いを優先させてしまった例

中学年では次のようなケースがありました。子どもがドリルをやり、新米先生は、「わからない問題があったら手を上げなさい」と指示して、そうした子を中心に見ていました。ところが一人の子に對しては、ずっと手を上げているのに、先生は無視してそこへ行かないのです。不審に思い聞くと、「私、あの子が苦手なのです」との答え。びつくりした私は苦笑いしながらも、「どの先生にも苦手な子はいるだろう。しかし、それは克服しなければいけない。苦手な子ほど寄って行って声をかけるようにしないと、場合によっては学級があるもともにもなりかねない」と話しました。

○自分のやり方を押し通そうとした例

問題行動の多い子に対しては全く逆の

対応をする新米先生もいました。学級全体には自習をさせてその子だけ廊下へ呼び出し、何やらきつく問いただしていきま。そのうちその子の泣き声は声が聞こえてきました。それでもなかなかやめません。気になった私は廊下へ出てしばらく様子を見守っていました。新米先生もどうしたらいいか収拾に困っているようでした。

初め新米先生は、どうして暴力をふるったのかと問いつめました。子どもは無言。業を煮やした先生は、強引に謝ることを約束させようと思いました。それで大泣きする事態となつてしまったのです。反抗的でその場から逃れようとする態度も見られました。そこで私が対応するようにし、声かけを見守ってもらうようにしました。

泣きじゃくる子を前に、世間話のように日ごろ感じているその子の良さを指摘しながら、気持ちをほぐすようにし、話せる感じになるのを待つてから、何をしたいのかを問うようにしました。そうして、「いつもはこういうところもあるのに、こうなつてしまったのは残念だったね」と言つて、教室へ戻しました。新米先生には、強引に教師の思い通りにしようとしても無理なケースは多いこと。その子の良さを認めながら、子どもの言い分、気持ちなどを聞くように努めると、心も解放されてうまくいくことが多いと話し

ました。

新米先生はまだ学級経営に慣れていませんから、子どもとの距離感がわからず、コミユニケーションがうまくとれないことも多々あると思います。経験が育てるといった側面は確かにあります。でも、ただ経験を積みばいいというものでもないようです。うまくいったり失敗したりしながらも積極的に声かけをして、コミユニケーション能力を高める必要があります。そして、どのようなタイプの子であっても、明るく生活でき、やる気ができるようにしたいものです。

また、新米先生は職員室でも、先輩教員や同僚と明るくコミユニケーションを交わせるようにしたいものです。先輩教員が声をかけてくれるのを待つてではなく、自ら積極的に指導助言を求めようようにしましょう。それには自分のカラに閉じこもらず、自ら心を開放し、柔軟性を身に付けることが大切です。

